

二〇二一年度

上宮学園中学校入学考査問題（一次A一般学力型）

国語

（注意）

- （1）この問題用紙は、「開始」の放送があるまで開いてはいけません。
- （2）問題は□一から□三まであります。試験時間は五十分です。
- （3）解答用紙は別に一枚あります。
- （4）解答用紙には、必ず受験番号・名前を記入しなさい。
- （5）「終了」の放送で、筆記用具を置きなさい。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

野球部員である中学二年生のヌクは、野球は好きだが下手なのでいつもグラウンドの外の球拾いをしていた。そこに、一年のときのデッドボールが原因で退部していた元野球部員で同級生の直樹なおきが近づき、野球の練習をしようと持ちかける。何度目かの練習で、二人はなぐりあいのけんかをしてしまう。直樹になぐられたヌクの顔は腫はれてしまっていた。本文は、それに続く場面である。

川沿いの堤防道ていぼうみち。さっきから、変化のない風景。

左側には草だらけの土手が続く。土手の下には、野球のグラウンドやゲートボール広場などが並ぶ。そして、その向こうには、夏の光を反射する川が見える。

時計を持ってないけど、すでに野球部の練習が始まっていることは、腐くさった牛乳を飲めばトイレに駆け込こまなければならぬくらいと。

直樹君の言うとおりに、この顔で練習に出ないほうがいいのはわかるけど、やっぱり気になる。

だいたい、ぼくらはどこへ行こうとしてるんだ？

ぼくは、直樹君にきいた。

「で、どこ行くの？」

「うーん、そうだな……。」

その答え方を聞いてわかった。<sup>②</sup>この男は、行き先を決めてないのだ。

「よし、このへんでいいかな。」

A

その言葉と同時に、ハンドルが左側に向かって切られる。

「ひゃっほー！」

急斜面の土手を駆け下りる自転車。夏草がタイヤにからみついて、スピードは少しも落ちない。

「わややややややや！」

ぼくのヒメあイあに関係なく、自転車は土手を転げるように走り下りる。

「大ジャンプ！」

直樹君の叫び声。

③ 自転車は大きくバウンドすると、ぼくと野球道具の入ったカバンを放り出した。

「いやあ、気持ちいいな。」

「ア」

川に向かって大きく伸びをする直樹君。

向こう岸では、おじさんと小学生が魚を釣っている。その傍らには、昼寝をする犬。

石に腰掛けたぼくは、カバンから出した傷テープを腕や足にペタペタと貼る。

「つまり直樹君は川に来たかったんだ。」

「うーん、そういうわけじゃねえけどな——。」

直樹君が、振り返ってぼくを見る。

「どこでもよかったんだ。さっきも言ったけど、その顔で練習に行ったら騒ぎになる。それに、夏休みに入っても練習漬けのおまえに、ちょっとばかり休憩をさせてやりたかったしな。」

④「それだけじゃないだろ。」

彼が、何か言いたいことがあるのは、会ったときからわかってる。

「……………」

直樹君は答えない。

川を見たまま、ボートと突っ立ってる。

まあ、言いたくなけりゃ、それでいい。

川面で魚が二回跳ね、飛行機雲が三本空に描かれ、腕に浮かんだ汗の粒が四つひつついたとき、直樹君が口を開いた。

「おれ、野球部に戻るわ。」

「イ」

「そうだね……。もうボールも怖くないんだろ？」

すると、直樹君がびっくりしたような顔で、ぼくを見た。

「知ってたのか？」

「ウ」

ぼくは、黙ってうなづく。

直樹君が野球部を辞めたのは、テッドボールが直接の理由じゃない。

ボールをぶつけられて以来、彼はボールが怖くなったからだ。

どれだけ才能やギジュツがあっても、ボールを怖がってでは野球はできない。カントンに打てたり捕れたりするボールでも、体が向かっていかない。

その、はがゆい気持ち。そして、周りの部員に、ボールを怖がっていることを隠したい気持ち。いろんなモヤモヤした気持ちでいっぱいになっ

て、直樹君はアバれたんだ……。

「ぼくを誘ったのは、ぼくがボールを怖がってないからだろ。」

「E」

「ああ。それに、おまえの投げる球なら、当たっても痛くないだろうと思ってな。」

B

言われ方だ。

でも最初のころは、ぼくの投げる遅いボールでさえ、直樹君は避けていた。恐怖心で、体が反射的に避けてしまうのだろう。そして昨日、ようやく、ぼくの投げたボールを避けずに当てることができるようになった。

直樹君が大ホームランを打ったのは、そのあとだった。

それまで、どれだけいいコースにボールが来てもバット——というか“棒”や“枝”を振ることがなかった直樹君が、振った。このとき、ぼくにはわかったんだ。直樹君は、ボール恐怖症を克服するために、ぼくと野球をしたことに——。

それがわかって、

X

は、少しもない。

楽しかったというのが正確だ。

野球部の練習もおもしろいけど、直樹君とやった木の枝とゴムボールの野球も楽しかった。だから、ぼくに不満はない。

直樹君が、足下の小石を放ってきた。

なんだ？

直樹君は、自分も一個持つと、川に向かって投げる。

C

アンダースローだ。

投げられた石は、ピシユピシユと水の上を跳ねる。一回、二回、三回——。

十回までは数えられたけど、それ以上は細かい波紋が続いてわからなくなった。

「ヌクも、やってみるよ。」

よし!

ぼくは立ち上がると、さっきの直樹君のフォームを真似て、投げた。

ぼしゃ!

石は、突き刺さるように川に沈んだ。一度も、跳ねない。

「ふふん。」

鼻で笑って、また直樹君が石を投げる。

ピシユピシユ!

みごとに水面を跳ねていく石。

どうして、ぼくの石は跳ねないんだ?

「おれさ、野球部に戻るけど——。」

直樹君が言う。

⑤「また、ときどき野球やろうな。」

ぼくは、答えない。そんなことにいちいち答えるより、今は石を三回以上跳ねさせることのほうが重要だ。

そして、

「こらー、いつまでやってんだ! 魚が逃げるだろ!」

対岸のおじさんに怒られるまで、ぼくらは石を投げ続けた。

(はやみね かおる 『打順未定、ポジションは駄菓子屋前』による)

問1 

A
---

C
---

 に入る言葉を、次の中から一つずつ選んで、それぞれ記号で答えなさい。

ア おだやかな      イ きれいな      ウ 失礼な

エ 真面目な      オ ひかえめな      カ 明らかな

問2 — 線部①「この顔で練習に出ないほうがいい」とありますが、その理由としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア もう退部したはずの直樹と野球の練習をしていたことが、他の部員に知られてしまうから。

イ 直樹になぐられたヌクの顔を見た他の部員たちが、直樹に仕返しをしにいかもしれないから。

ウ ヌクの落ち込んだ表情を見た他の部員に、練習に無断で遅刻ちこくした理由を問いつめられるから。

エ ヌクの腫れあがった顔を見た他の部員に、事情をあれこれと聞かれてしまう可能性があるから。

問3 — 線部②「この男は、行き先を決めてないのだ」とありますが、この表現の効果としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 直樹君を「この男」と呼ぶことで、いい加減に行動する直樹君に腹を立てる気持ちを力強く表現している。

イ 直樹君を「この男」と呼ぶことで、無計画な直樹君にあきれられる気持ちをおもしろおかしく表現している。

ウ 直樹君を「この男」と呼ぶことで、直樹君がどのような人物なのか理解できたことを的確に表現している。

エ 直樹君を「この男」と呼ぶことで、何をするか分からない直樹君への不信感を分かりやすく表現している。

問4 — 線部あくえのカタカナを、それぞれ漢字に直して答えなさい。

問5 — 線部③「自転車は大きくバウンドすると、ぼくと野球道具の入ったカバンを放り出した」とありますが、この部分に用いられている表現の名前としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 体言止め      イ 直ゆ      ウ ぎ人法      エ 倒置とうち

問6 次の一文は、文中の「ア」く「エ」のどこに入りますか。一つ選んで、記号で答えなさい。

少し照れたような口調。

問7 — 線部④「それだけじゃないだろ」とありますが、ヌクは、直樹君が本当はどのようなことを言おうとしていると考えているのですか。「ボール」という言葉を必ず使って、三十五字以内で答えなさい。(句読点なども一字に数えます。)

問8 に入る言葉としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 役に立ててうれしいという気持ち
- イ 信頼しんたいされてほこらしいという気持ち
- ウ 意味が分からず不安だという気持ち
- エ 利用されてイヤだったという気持ち

問9 — 線部⑤「また、ときどき野球やるうな」とありますが、直樹君がそう言った理由を説明した次の文の  は  六字、  は  十三字で文中からぬき出して、それぞれ答えなさい。(句読点なども一字に数えます。)

ヌクがいっしょに練習をしてくれたことが、  がきっかけでボールを怖がっていた自分が少しずつその気持ちを振り払う  ことにつながり、最終的には  まで可能になったので、感謝しているから。

問10 — 線部⑥「れる」と同じ働きのものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 担任の先生が班分けを発表される。
- イ 苦手だったピーマンも今は食べられる。
- ウ 発表をみんなに見られるのははずかしい。
- エ 遠くで暮らす祖母のことが案じられる。



① 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

もしかするとみなさんは、先生やご両親から「人を疑うのはよくない」と教えられてきたかもしれません。でも、こう考えてください。

友だちや先生、ご両親など、まわりにいる「人」を疑う必要はない。

けれども、その人たちの語る「コト」については、疑いの目を向けたほうがいい。なんでも鵜呑みにせず、自分の頭で考える癖をつけたほうがいい。

いいですか、「人」を疑うのではなく、「コト」を疑うのです。この「人とコト」を切り離して考える習慣をつけておきましょう。

それではなぜ、疑う力が大切なのか。

みなさんのご両親が中高生だったころ、また、おじいちゃんやおばあちゃんが若かったころ、疑う力は、それほど重要視されていませんでした。むしろ当時は、「なんの疑いももたず、与えられた課題をガンガンこなす人」が求められていました。数学の問題集をたくさん解いていくような、「課題解決」の力です。

でも、「なんの疑いももたず、与えられた課題をガンガンこなす人」は、いまやアジアやアフリカにもたくさんいます。ら、日本人よりもずっと安い給料で働いてくれます。

さらに、コンピュータやロボットを使えば、人間よりもずっと速く、たくさん課題をこなしてくれます。コンピュータやロボットには、お給料を払う必要さえありません。こうして昔ながらの「課題解決」の仕事は、もはや日本人には回ってこなくなりました。

それでは現在、みなさんにはどんな力が求められているのか？

答えはひとつ。③ 「課題発見」の力です。

A 彼らな

課題発見の意味について、わかりやすい事例を紹介しましょう。

20世紀の初頭に「自動車王」として一時代を築き、世界初の量産型大衆車を製造したアメリカの実業家、ヘンリー・フォードはこんな言葉を残しています。

「もしも人々になにがほしいか尋ねたなら、彼らは『X』と答えていただろう。」

自動車ふきぐるまが普及する前の時代、人々の乗り物はもっぱら馬車aでした。

遠くに移動したい、もっと速く移動したい、と思ったとき、ほとんどの人々は「もっと速く走れる馬を手に入れよう」と考えました。「馬車」という常識に縛られ、それ以外の乗り物のことなんて、想像することさえできなかったのです。

B、フォードの発想は違います。

馬よりも速く、馬よりも疲れを知らない、もっと便利な「なにか」があるはずだ。

そう考えたフォードは、人間は馬車で移動するものだ、という当時の「あたりまえ」を疑い、まったく別の道を探っていきました。そうしてたどり着いた答えが、ヨーロッパで発明されたばかりの自動車だったのです。

当時の自動車は、まだまだ数が少なく、一部のキゾクやお金持ちにしか買えない「超ちょうぜいたく品」でした。現在でいうなら、家用ヘリコプターや家用ジェット機のような感覚です。自動車が馬車の代わりになるなんて、誰も想像していませんでした。

フォードは、この「超ちょうぜいたく品」である自動車を、④ どうすれば安く製造できるか考えました。あたりまえの話ですが、自動車にはエンジンがあります。これは「超ちょうぜいたく品」で、つくるのにかなりのお金がかかる装置です。そしてその他の部品も、馬車とは比較ひかくにならないほど多くあります。このあたりのお金を削るわけにはいきません。

それではどこを削るのか？ フォードが目をつけたのは、「時間」でした。

ひとつの部品をつくるのに1時間かかっていたところを、5分でつくるようにすればいい。そうすれば1時間で12個の部品ができる。1時間分のお給料で、12倍の仕事をしてくれるようになる。



問1 — 線部①「両親」と同じ成り立ちになっている熟語を、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 高校      イ 近代      ウ 表現      エ 着手

問2 A C に入る言葉を、次の中から一つずつ選んで、それぞれ記号で答えなさい。

- ア つまり      イ しかも      ウ だから  
エ きて      オ しかし      カ たとえば

問3 — 線部②「もはや日本人には回ってこなくなってしまった」とありますが、それはなぜですか。説明した次の文の

- 2 3 に入る言葉を答えなさい。ただし、1 は二字、2 は二字、3 は十字以内でそれぞれ答えなさい。ただし、二か所ある1 は同じ言葉が入ります。(句読点なども一字に数えます。)

日本人は外国人よりも 1 が 2 、機械と違って 1 が必要で、同じ量の課題をこなすのにも 3 から。

問4 — 線部③「『課題発見』の力」とありますが、それはどのような力ですか。説明した次の文の 1 2 に入る言葉を

- を答えなさい。ただし、1 は七字、2 は十二字で文中からぬき出して、それぞれ答えなさい。(句読点なども一字に数えます。)

1 を解決しようとするのではなく、2 よりよい解決を目指すか。

問5 X に入る言葉としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 自動車を作っしてほしい      イ もっと速い馬がほしい  
ウ 馬より便利なものがほしい      エ 馬のような自動車がほしい

問6 ——線部 a「もっぱら」・ b「爆発的」の文中での意味としてふさわしいものを、次の中から一つずつ選んで、それぞれ記号で答えなさい。

a 「もっぱら」

- ア ある物事ばかりである様子
- イ 多くのものの一つである様子
- ウ かたよってバランスが悪い様子
- エ ある方法を仕方なく選ぶ様子

b 「爆発的」

- ア 化学反応はんのうを起こし周りをこわす様子
- イ 一部の人々に強く求められる様子
- ウ 他のものがすべてなくなる様子
- エ とつぜんのはげしい変化が起こる様子

問7 ——線部あくえのカタカナを、それぞれ漢字に直して答えなさい。

問8 ——線部④「どうすれば安く製造できるか」とありますが、それを考える過程でフォードが作り出したものは何ですか。文中から二十

六字で探し、最初と最後の五字ずつをぬき出して答えなさい。(句読点なども一字に数えます。)

問9 本文の内容を説明した文としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 課題解決が求められた時代に働いていた人たちは現在の状況じょうきょうをよく知らないのです、彼らの発言は疑った方がよい。
- イ フォードは人々が求めている通りのものを的確に見ぬきそれに合わせて自動車を作ったので、大いに喜ばれた。
- ウ 世間で常識とされているものを疑い、現時点では存在しない新たな仕組みを考えていくことが求められている。
- エ いまの日本には「馬車」があふれているので、その一つ一つをもっと速く走れるものに変えていく必要がある。

二二

次の1〜10の( )に漢字を入れ、四字熟語を完成させなさい。また、その意味としてふさわしいものを、後から一つずつ選んで、それぞれ記号で答えなさい。

- 1 弱肉( )食
- 2 因果( )報
- 3 日進( )歩
- 4 一期一( )
- 5 ( )学多才
- 6 電( )石火
- 7 朝令暮( )
- 8 岡目( )目
- 9 事实無( )
- 10 ( )耕雨読

- ア 絶えず良くなっていくこと。
- イ きわめて短い時間。
- ウ 実際とはまったく違<sup>ちが</sup>っていること。
- エ 自分の行いに合った結果がもたらされること。
- オ 一生に一度だけの出会い。
- カ 知識が豊富で能力にめぐまれていること。
- キ カの強い者がさかえること。
- ク 当事者より第三者の方が状<sup>じょうきよう</sup>況を理解しやすいこと。
- ケ 指示や方針がころころと変わること。
- コ 自由気ままな生活をする事。